
紅色の狼

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅色の狼

【Nコード】

N4880R

【作者名】

川中流一

【あらすじ】

此頃都二ハヤル物。

夜討強盗謀論旨、

黄昏時二成ヌレハ浮カレテ歩ク色好、

落日シテ徘徊ズルハ悪肉喰ラフ獣共

異国に脅かされ、千年続く貴族の世にも陰りが見え始めていた。

天より墜ちて地に立った、一人の男が牙を？く。夜を切裂かんが為

哀し愛しあいのそらの下、都に紅い花が咲く。

一・紅色の狼

此頃都二ハヤル物

夜討、強盜、謀^{にせりんじ}綸旨

召人、早馬、虚騒動

生^{なまくび}頸、還俗、自由出家

黄昏時二成又レハ、浮カレテ歩ク色好

譜第非成ノ差別ナク、自由狼藉ノ世界也

通り、男が足を止めて落書きを見た。

年は幾つか。顔の左大半が包帯に覆われている。

首筋まで這う黒髪を潰して巻かれた白布、その下は火傷か縫跡か
どれほどの醜顔か判らない。

「若、」

声に前を向き、男は紅い落葉を踏み締めた。

通り、木枯らしが枯葉を巻いている。

+

きやああと阿鼻叫喚の声に満ちる。

遊郭桐楼閣では、女達が郎党から逃げ惑っていた。

「奪え奪え。異人どもの所為でものの値は跳ね上がり、俺たちや食
う米も無く餓える始末

。お貴族様は異人に酒振舞い踊り狂っている。もう我慢ならん、打ち壊せ！貴族に媚びる売女共は剥いで奪い打ち壊せ！」

娘が隠れていた。目に鮮やかな着物の配色と簪を見るに、遊女である。物の壊れ地鳴る足音、泣き叫ぶ声に紅い唇を噛み締めて、狭い物入れに体を縮ませていた。

襖一枚隔てたすぐ外に脅すような怒鳴り声が聞こえる。

「答える、女！この見世の看板芸妓はどこにいる」

命を乞う泣き声、どたどたと幾つもの足音が近づく。
がらんと引かれた眩しさに目を細めた。

「これが都一の遊女か」

縛られて土間に座らされた娘に、顔に包帯を巻いた男が顎鬚を撫でて卑しい目を向ける。

「まだ娘つこというのにのう。今まで何人の男を誑たぐらひかした？ん？」
地鳴るようなしゃがれ声と降りかかる唾に娘は顔を顰めた。

「なんじゃ、生意気な顔をしておつて。お高い遊郭の女はこんなところの馬の骨かもしれん男じゃ相手にならんか」

娘は男を睨み上げた。

「他の……皆は！」

ふん、と笑って鼻を鳴らす。

「まとめて売り捌いてやるわ。なあにすることは変わらん。ただ場所が溝川沿いの女郎屋に変わっただけじゃ。これからは見下していた野郎共に一枕三文で媚びればいい」

「……！」

「おうおうそう睨んでは可愛い顔が台無しじゃ。青臭い小娘だったとは残念じゃが、じゃじゃ馬馴らしも悪くない。味が良ければわし

の女にしてやろう」

「お生憎、死んだ方がましよ！」

ぱん、と頬が叩かれた。縄を持つ人相悪い男が睨む。

「口に気を付けろ、女」

「何、俺達を誰と知れば大人しくなるだろう」

「夜盗強盗、狼藉働く無法の輩を斬り捨てて、悪徳商人は身包み剥いで一夜で乞食、」

「近頃都の噂を持ちきりの、悪党も黙る懲悪党」

「紅狼衆とは俺らがことだ！」

「あんた達が……」

呆然とした様子で娘は郎党達を眺めた。誰も彼もにやにやと薄汚ない笑みを浮かべている。

「そうだ、娘。俺たちの頭の女とは名誉なことだ。有難く礼を言え」
「そうなの……」

何故か放心した状態の娘は立たされて、大男の太い腕に引き寄せられた。

「おお、細っこいのう。若い女子はいい匂いがする」

「ちよつと、やだ、」

娘ははつとして抗うが、体を閉じ込められて身動きが取れないでいた。

「よしよし、」

男はもかく女を捕らえたまま立つと取り囲む郎党共を見渡す。

「お前達も捕らえた女は好きにしていぞ」

「さすが頭、懐かでえや」

離し立て湧き上がる声に大男はにやりと笑う。

「売り物にはなるようほどほにな」

「頭！」

勢い付けて、腰に棒を差した下っ端らしい若い男が飛び込んで来た。

「大変でい！隠れ家が嗅ぎ付かれやした！」

「なんじゃと、役人か！」

「いんや、男が二人、乗り込んで来ていやす！」

「なんじゃ、たった二人か。驚かすな。おい、数で囲んでひっ捕らえて来い。殺してもいい。いや、見張りの者はどうした。屈強な者共の筈だぞ」

「やられやした！」

「なんじゃと？」

ぐわ、と、入り口付近の男が突然奇声を発して前に倒れた。その影から帯刀した男が一人現れる。大男に較べると大人と子ほどの体格差もある細身な若い男だった。しかし大男は凝視する。皆凝視する。その黒い髪に無造作に巻かれた包帯

「お前は、まさか」

一瞬だった。

血が踊り、地にぼたぼたと落ちる。

一番部屋の奥にいた筈の大男が体ごとゆっくりと傾き、傾き、傾いて、最後にはどしいんと柱を揺らすような地響きを立てて床に倒れ伏した。

「か、頭……」

瞬きする間の惨状に、誰もが声を失う。

片顔包帯の男が紅く濡れた刀をび、と切ってちらりと見た。

「ほ、本物だあ！」

ひいい、と竦み、郎党共は互いに押しのけ押しのけ狭い出口に向かつて一目散に逃げ出した。

地震の前に鼠が消えるように、一瞬だった。がらんとした土間に、しかし下っ端一人だけが取り残されている。男は目もくれずにきんと刀をしまった。

下っ端は、大男を紅く染めていく一文字の斬り傷を検分して漸く口を開く。

「流石若、血も涙も無い太刀筋ですね」

ふん、と仏頂面の男は踵を返す。

「帰るぜ」

紅に濡れた肉隗だけがそこにあつた。

あたかも血に飢えた獣の牙に襲われたように。

「天」

細い声が反響して、下っ端格好の男が振り向いた。

二・十人目

「あ、若お帰んなさい」

「若じゃねえって言ってるんだろ」

「いいじゃないですか、組の若頭みたいな意味合いですよ、きつと」
早々と畳に上がり濡れ布巾で顔を拭く下っ端格好に変じた男が口を挟む。

「元はと言えばてめえの所為だろ」

軽く睨むが諦めたように溜息をつき、腰をかけて男も草履を脱いだ。
だ。

「ていうか若、さつきから気になってたんですけど 誰ですか？
その娘」

後ろに連れていた年若の娘に一同が興味津津といった様子で注目する。

「知らねえ。影郎が連れてきた」

素っ気無く言つと、さつさと土間を上る。

「おい影、なんだいその娘」

「いや、今件で捕まつてた娘なんです、若がまた派手に血塗れにしてくれた場所に放つて置くのも可哀想でしょう。取り合えず落ち着いて、もし行くところないようならここで家事して貰つても助かりますし」

「はあ？」包帯の男が振り向いた。

「馬鹿か、男所帯だぜ」

「いや影のいう事はもっともだが、若。俺はいい加減まともな飯が食いたい」

「なんだい、あたしの作った飯が不満かい」

からんと襖が引かれて、艶のある女が出てきた。

「げ、咲さん」

「いや、今のは言葉のあやで　ほ、ほら咲さんが楽になるかな、と」

あたふた仕出した男達に、やれやれと首を振る。

「てめえら贅沢を言うな。咲の不味いみそ汁で我慢しろ」

「天、一週間具なしね」

「は、何でだよ！」

「若、一言多い」

どつと笑いが起きた。

「で、なんなんだいその子は」

今だどうしていいか分らなさそうに土間に佇んでいる娘に女はちらと目を向けて言う。

「いや、なんか若の名前を呼んだので昔の女とかかな、と気を利かせて連れてきました」

「ええ？」

今度は包帯の男の方に視線が集中する。

「おいおい、なんだよ若」。知らないとか言っちゃって、何で隠したんだよ？水くさいぜ」

「黙れ」

一睨みして、不機嫌な様子でとん、と襖を引くと居間を後にしてしまった。

「あーあ、不貞寝しちゃった」

影郎と呼ばれた男は事も無げにくすくすと笑っている。

「じゃ、あたしは慰めてあげよつと」

可笑しそうな様子で女も後に続き奥に引っ込んだ。

「それにしても若、いつにも増してむっつりしてたな。まあ人斬った後はいっつもだが」

「若の偽者があまりに似つかない醜男ひがうこだったからかもしれないね」
影郎が物知ったような生真面目顔で言うと、一同にまた笑いが上

がる。

「おいおい影、聞かせるよ、その話。どんな人相だったんだ？」

「まあ一言で言うとお包帯巻いた猪ですね。だから言っただけですよ、誰か身を挺してでも役所に行つて若の人相書に色男って付け加えて置けばこんな悲劇は起こらなかったのに」

「役人の前に若に殺されるだろ」

一頻り^{しき}笑つた後、置いてけぼりで居辛そうにしている娘に声をかける。

「ほら、そんなとこいないでこつち上がんなよ。栗羊羹もあるからさ。ね、小雪さん？」

「なんで、あたしの名前？」

「いやいや鎌かけたただだよ」

朗らかに影郎は笑う。

「ま、ゆっくりしてきなよ。雪ちゃん」

+

「うまい」

大根のみそ汁を啜つた男が顔を上げると、歓声上がる。

「やったね雪ちゃん！合格だ」

「これからよろしく！」

「おい、何でみそ汁の味が入隊審査のようになっている？」

「大事な事でしょう」

うんうんと頷く男達にやれやれと言う表情を見ると、娘の方に顔を向ける。娘は弾んだようにぴんと背を真っ直ぐにさせた。顔は赤い。

「どうなっても知らねえからな」

それだけ言つて男はまたみそ汁をずずと啜つた。

男の言葉に困惑気味にしていると、ぽんと肩を叩かれる。

「今のは了承つてことでしょ」

「俺に惚れても知らないぜ？ 的な？」

「なんなら俺に惚れても知らないし？」

「あんた達、ふざけてんじやないよ。けどまあ、天に惚れても無駄だよ。こんないい女にだつて手の一つも出さないんだから」

「あれ、咲さん牽制ですか？」

きつく睨まれて男は首を引つ込め、皆笑つてみそ汁の椀を持ち上げる。その数、十。

「これにて晴れて仲間入り！」

都の一角、山を背にした広大な敷地に屋敷が建つていた。

霧崎家。政を取り仕切る重要な役職は全てこの一族で占められており、端役までもほとんどがこの家と縁戚関係にあるか、あるいは古くから縁故のある上流貴族が務めている。

朝、燕尾服の男がモーニング・ティーと新聞を置いた。まだ着流し姿の主人がぱさりと新聞に目を通す。

「桐楼閣か」

「幾ら貴族御用達などと銘打っているとはいえ、所詮は遊郭。襲つたところで当て付けになるとも思っているのでしょうか。全く下賤の者というのは浅薄粗暴で仕様もない」

別段表情も変えずに紅茶に手を伸ばす主人に向かって、執事風の男はこの際とでも言うように申し立てる。

「そもそも遊郭など都の汚点、花魁などと囃されても所詮はこの

馬の骨ともしれない春女ではありませんか。そのような穢らわしいもの、いつそ廃止してはいかがでしょう」

漸く主人はくす、と笑った。

「遊女に何か恨み事でもあるのか？川野」

「若君、私はあのような場所に足を踏み入れた事などございません」

「素朴な疑問だが いや、止めて置こう」

「万が一にも誤解が無いよう申し上げますが、無論私に男色の気などございません。妻も娶らないのは、生涯この身を霧崎家に献じ、何時如何なる時も若君のお傍にてお仕えすることが使命であり喜びであるからでございます」

「どちらかと言えば気持ち悪いな、それも禁欲的な人間というのは」

「若君、私は」

目を通していた新聞をもう読み終わつたのかぱりと置いて、男は微笑した。

「助かっている。 そうだな、遊郭は停止だ。 についてはお前に頼みたい」

「は、なんなりとお申し付け下さいませ」

「件の女達の保護と全遊郭で生業していた者の保障だ」

「 恐れながら現在の財政では難しいと思われます」

「お前が無用と思つた支出を切つて宛てる。 飯は漬物がつけば文句は言わねえ」

何か愉しんででもいるかのように莞爾とした黒い眼が執事に向けられる。

「任せていいか？」

「 勿論でございます。 若君の御健康の為に魚一匹減らすことなく致しましょう」

では早速、と礼をして立ち去るのをふと止める。

「それと 捕縛した者の取調べはいい。 偽物だ」

「何故、偽者だと？」

男はふ、と笑う。

「あいつがすると思っつか？」

三・扇子と剣

「遊女の輸出　？」

包帯巻きの男が眉を顰めるが、円になって座る他の者達も同様に顔を顰めていた。報告していた者が続ける。

「何でも遊郭看板降ろしの触れが出たつてんで、遊女に宛てられた筈の保障金をせしめるばかりか上からの手が回らないうちに異国に売り捌いちまおうつていう吝嗇人が出てきたつて話だ」

「小聡いな。それが本当ならもたもたしてたら手遅れになるぞ。異人共に引渡しちまった後じゃ手が出せない」

「しかしそんなことが本当にできるのか。船の出入り管理は厳しいと聞いたぞ。それが明るみに出たら即打ち首、下手に騒ぎ起こして居合わせたら問答無用で同罪を下されるぞ」

「馬鹿野郎、臆病者はすつこんでろ」

「なんだと、無鉄砲に突っ込んで馬鹿だつて言つてんだよ。なあ、頭」

「無理だろう」

ざわついていたのがはたと止まって注目する。

「密輸などうまくいくか。話は物じゃねえんだぜ？」

ちらと視線を流す。

「咲、お前だつたら売られる為に黙つて船に乗せられるか」

「まさか！逆にとつちめてやるよ。役人が来るまでに股ぐら思い切り蹴つて使い物にならなくしてやらなきゃ気が済まないね」

女は憤慨して息巻いたが、でも、と男の一人が借りてきた猫のようにちよんと座っている娘に目を向けて言う。

「咲さんはそうでもほら、雪ちゃんみたいに大人しい子もいるし」
は、と包帯の男は鼻で笑う。

「土壇場になれば猫被つてゐる訳にもいかねえだろ」

「なんですか、若。思わせぶりの発言されても我々は雪ちゃんの気を許した姿など知らないんでもっと具体的に言つて貰わないと」

「無駄話がしたいなら席を外せ、影」

途端に睨まれて、ちよつと笑いかけた他の者たちも慌てて口元を引き締める。

「で、話を元に戻すが、今回ののもうちよいと根の深い話だ。裏筋の話に依ると、輸出の話に上がつてんのは……」

声が軋められて、皆の顔にも幾らか緊張が走つて耳を傾ける。

「『扇子』だ」

はつと息を呑む音が静寂に響くが、あまり呑み込めていない顔が半数だった。包帯の男も怪訝な顔している。

「扇子？　を輸出して何が悪いんだ？」

年若の男の一人がぼつりと疑問を口にする、影と呼ばれている男が答える。

「まあ、私も子供の頃の事です、若などは生まれる前の話ですからね。今じゃ禁句になつていたので知らないのも当然のことです」

「扇子っていうのは……早い話が、一昔前にあつた愛玩奴隷の俗称だ。それも貴族専用のな」

重い口を開いて、一番の年長者が答えた。

「十数年前に奴隷制は廃止されたが、事の発端がその『扇子』だった。まだ少女程の娘をものとして扱い、拳句に大抵は数年で『処分』されたと言う。今の霧崎様が廃止に乗りだすまで、貴族の連中の間では当然の如くに続いてきた因習だった。……奴隷の中から選りすぐつて集められた娘達は、半数以上が命を落とす『訓練』を経て皆人形のように無抵抗になるらしい」

「『扇子』は全員保護された筈だが　悪い人間は尽きないもんだ」
「特定ができねえ。今だに目をかいくぐって元『扇子』を金にして
いる連中がいるってことだな」

話が飲み込めると共に皆顔が険しくなり、憤るように一人が声を
荒げ膝を立てた。

「それで、今回の触れで遊女の名分すら立たなくなるから捨てるく
らいなら金に換えちまおうって魂胆だな」

「許せねえなあ」

熱気を底冷えさせるような静かな声に全員が息を呑む。

その男の背には燃える蒼い業火が見えるようでぞっと肌が粟立つ。
しかしそれは一種武者震いでもあった。不利も何も無く、修羅の下
にいるような無敵の気概になる。

片眼包帯の男の唾が押され、擡げた刀身が鈍い光を放つ。

「野郎共、斬り込むぜ」

おおお、という雄叫びと共に八本の剣が掲げられた。

四・覚悟

「捕まるなよ。ここから先は領事裁判権区域だ」

物陰から先の門兵を確認し、振り向きざま鋭い目で男は言った。

「なんだい、料理なんかかてのは」

「国の律じゃなくて異国人の勝手に裁かれるんだよ。もし密輸が本当なら隠蔽されて生きて帰れねえだろうなあ」

「なに気弱になってんだい」

ぴしゃりと叱咤した女もまたちよつと顔を出してアーチを描く石積みの門を見た。門番は男二人だ。

「あたしに任せな」

妖艶に微笑んだ女が壁から出て行こうとしたと同時に後ろ襟がぐいと掴まれ引き戻される。

「何すんだい、天」

「雪に行つて貰う」

え、と皆が目を点にする。名前を出された本人も目を丸くしていた。

「付いて来たからには役立つてもらう。足手纏いならここで帰れ」

「ちよちよつと若、雪ちゃんは今日が初めてなんだから」

取り成すように言つた影郎をきろりと見る。

「初めてだから、なんだ。俺たちはいつも命を懸けている。咲も懸けている。覚悟のねえ奴の為にさらす命はねえ」

直刃の如き黒い片眼で、射るように見つめられる。

「死ねるか、雪」

ぐ、と拳を握つた。

分らない。見知らぬ人の為に命を賭すということも見知らぬ人の命を奪うことも。

「ただ、天が

ちらりと見た門番、震えを越えるように声を張上げる。

「生きる為なら！」

ふ、と口端が上がったように見えたと同時に

「お前たち、ここに何用だ！」

「あ、やば」

口を覆ったところで時遅く、声を聞きつけたのだろう帯刀した門兵が現れる。

堀の近辺を警護していたらしい役人達も次々と集まって、あつという間に立ち塞ぐようにずらりと並ぶ。皆剣の柄に手をかけ睨んでいた。

「ごめんなさい！」

「成程お転婆みたいだ」

答えた一人が面白そうに言った。他の皆もこんな時なのに何か吹き出しそうな表情をしている。

「どうします、若。盛大に見つかっちゃいましたよ。一旦引きますか」

「見つかるなとは言ってねえ」

「怪しい奴ら、ひっ捕らえろ！」

門兵が叫ぶ。剣を抜く。と同時に包帯の男が一人前に駆け出した。ぐお、とつまった声を出して、二三人ががくと膝をついた。男は抜いていない。峰打ちのようだ。途端に一人を囲んで剣が振り上げられる。

「天！」

「ぐあつ……」

累々倒れた門兵の中、男が一人立っていた。

「捕まるなと言った」

ひゅうと口笛が鳴る。

「あーあ、ずりいぜ、若。また一人だけ格好つけちゃって」

「言っとくけど役人なんか剣は脅しだけの鈍らだからな。別にあれくらい俺でもできるぜ、雪ちゃん」

剣を腰に戻すと男は構わず淡々と言う。

「各自別れて探せ。雪は俺についてこい」

「あ、うん」

たつとその元に行くと、よしと言って駆け出すので走ってついていく。

「ほらそうやってー。若のたらし！」

「天邪鬼！」

「いいとこどり！」

「俺について来い！」

ばこばこばこん、と口を拗ねさせた男達に拳骨が落ちる。

「てっ！」

「氣い緩めてんじゃないよ。あたしらも行くよ！」

「はい、咲さん」

頭をさすって返事した。

「まあまあ、咲ちゃん私は私が守りますから」

一人朗らかに笑って影郎が締めると、皆駆け足で門へと向かった。

五・路地裏

訊きたい事がいっぱいあった。

黙って男の後ろをついて行きながら、今はそんなことを考えている場合じゃないと思いつつそんなことばかり考えてしまう。

その包帯は。

どうして浪人に。

何で人を斬ってるの？

……だつたのに。

「きゃ、」

ばすんと前の背にぶつかる。よろける前に、突然止まった男に手をぐいと引つ張られ路地裏に隠れた。ち、と舌打つ横を洋服を着た憲兵が通り過ぎる。

この通りは西洋式の家屋が横一列に並び遠くまで見通せる。近道にはいいが隠れながら進むには足止めが多かった。

「余所見をするな」

路地裏というよりほとんど家屋の隙間で、背の高い煉瓦壁に挟まれて薄暗い。黒い衣に隠すように身を引き寄せられて、頭のすぐ上に聞こえた低い声に耳が熱い。

こんなときにこんなときにこんなときに、と自分の心臓を恨めしく思った。絶対に伝わらないように、心持ち離れる。

「……こうしていると、くすと男が笑った。

「口付けたくなってくるな」

「な……！」

頭が混乱して体が沸騰する。なんでこんなときにこんなときに。

「俺の為になら命を懸けられると言ったな？」

「よ、天の為にとは……言ってない！」

「唇は動いていた」

「嘘……どこ、見てんの」

口元から上を見れない。黒子の一つついた、色っぽい口元がくすり笑って動く。

「お前もだろ？」

固い煉瓦壁に背がとすんとくつついた。前は体。逃れられない。

「天……」

「奪われたいか？」

口元を指が触って、頭は茹って使い物にならない。こくと喉が鳴ったのが、頷いてしまったようだど気がついた途端一気に顔が熱くなる。

「ならやめた」

え、と拍子抜けた声が出て、期待したみたいで恥ずかしくて消え入りたい。

「俺はお前を許せねえ」

「天　ごめんなさい。でも、」

「言い訳なんて聞きたくねえよ」

胸が締め付けられるような哀しい微笑をして、男は行くぜと言って背中を向けた。

何も言えずに後を従った。

+

「どう思う？佐助」

「どう思つて、……当たり前だろ、佑助」

ごくりと唾を飲んだ先には、女達がいた。揃いも揃って美しい。ただし誰も彼も目の光がなく、盲めしいのように虚ろだった。形容すればまさに、人形。

「俺、なんか……吐き気がする。人間、だよな？」

「当たり前だろ……　これで全員なのか？思つたより少ないな」

小型の船も入りそうな巨大な倉庫の隅に、十数人、『置かれた』ように綺麗に整列して何の挙動も示さない。ただ瞬きをしていることが、人間と言える証明だった。

「初めてだな、助けに来て拍手喝采を受けないってのは……折角今日が一番乗りだったのに」

「馬鹿言つてんじゃねえ。てめえは英雄気取りにここに来たのか」
ええい、と思い切つて女の一人の手首を掴んだ。その生暖かい人間の体温に、ほっとするよりぞつとしたのを覚えて自分に腹が立つ。女はよろけたが抵抗なくそこに突っ立ち、そして依然としてうんともすんとも言わなかった。

「……どうする？これじゃ石運ぶのと同じだぞ」

「……」

「憲兵一人にも見つからずにおぶつていくのか？」

「だーっ、分からねえよ、俺に聞くな！若も影も長十郎もいねえんじゃ話になんねえ。召集するしかねえだろっ」

「どうやって？」

「こうやって！」

男は懷に手をいれるなり尺玉に火を点けばんと外道路に投げる。ひゅるりと上がりばぱぱんと軽快な音を立てて咲く。

「何してんだよ！憲兵も気づくだろ！」

「びびってんなら勝手に逃げる。俺は一人だって動かねえよ。若が来るまで持ちこたえてやる」

「馬鹿野郎。逃げる訳ねえだろ、この俺が」

男はぐるりと倉庫を見渡し、大量の銃器を見て取るとにやりと笑う。

「火を扱わせちゃ右に出る奴はいねえ、この佑助がな！」

「そいつはこの佐助の台詞だぜ！」

早くもかんかんとして石畳を叩く靴音が徐々に近づいてくる。

「やるぜ、佐助！」

「おうよ、祐助！」

「花火の見えました！」

西洋人街、最奥に立つ洋館でプラチナブロンドの貴婦人ががたと突然立ち上がった。

「え？」

もう一人、ティーブレイク中だった男が驚いて外を見るが特に何かは見えない。

「少し、確かめてきます」

「え、ちよっと 分かった、僕も行くよ」

目の前をばたばた走って行き早速ボンネットを被る姿に苦笑して男も立ち上がった。外出時にピストルを懐に入れるのは、ここに来てからは靴を履く代わりの習慣のようになっていた。

子供のように天真爛漫な彼女の無邪気さ。だけどどそれは、空元気をしているんじゃないかと思うことがある。

あの人と別れてから。

六・乱闘

だだだだだん、

だだだだだだん、と銃撃音が鳴り響く。刃が？み合う。

七人の男達と数十人の裏商人の雇われ浪人達が剣戟戦を繰り広げていた。

正確には、六人。

「影、あんた何やってんだい。引っ込んでないで出てお行き」

「いやだなあ、私は影で働く男。こういうのは向かないですよ」

「向く向かないがあるかい、男だろ」

「あるんですよ。私という優秀な偵察を失ってはいけません。尤も、咲さんに流玉が飛んだときの盾になると言っなら誰も惜しまないでしょうけどね」

「　　ったく。相変わらず口だけは上手いねえ」

倉庫奥の物陰、片目を瞑る男に女はやれやれと呆顔を見せて、倉庫前の乱戦の状況を伺う。

実戦を生き延びてきた強者だけあって、一人も倒れることなくばったばったと浪士を斬り倒していく。だが斬り伏せても伏せても次々と出てくる浪人の数に、やはり皆疲弊の色が見えた。このままではいずれ時間の問題だろう。く、と女は悔しそくに唇を噛む。

「　　天は何やってんだい」

「まずいですね。この分じゃ若は　　」

男は真剣な表情になり、眉間にぎゅっと皺を作る。

「道に迷ってます」

「　　はあ？」

「若は結構の方向音痴なんですよ。あんまり外を出歩けなかったの

と人に物を聞けない性分が災いして」

「なんだいそれ、嫁入り前の娘じゃあるまいし」

「まあそのようなものです。後は雪ちゃんに賭けるしかありませんね、尺玉が上がったときに余所見していなければ」

お、鬼い！

突如悲鳴が聞こえて、びたりと空気が変わった。

どさどさどさ、と一角浪士たちの壁が崩れたところに、血の滴る刀を手にした男が現れる。

「待たせたな、てめえら」

「若っ！」

「若あ！」

「頭ア！」

皆歡喜に沸いて疲れていた様子が一拳に吹き飛んでいく。

「騙されちゃいけません、ただの遅刻ですよー」

ちよつと気まずそうにした顔を見て取ると、影郎の顔にもふ、と緩みが出る。

影からぴよこんと雪の姿が現れるがちよつと膨れっ面をしていた。

「だからこつちだつて言つたでしょ、天」

「分かつてたら最初から言えよ」

「天が迷いもしないから考えがあるんだと思つたの！」

「はいはい痴話喧嘩はあとにして」

と、いつの間に出てきたのか影郎が二人の間に入る。

「若、」

「分かつてる 下がつてろ、雪」

「はい」

眇められる黒い瞳、口元は妖しく歪む。

「地獄に堕ちろ」

紅い剣が舞った。

七・鬼の怒り

黒ずんだ花が石畳に乱れ文様を描く。その上にまた鮮やかな真紅の花が咲いていく。

黒眼に捉えられた。

「ひ、」

視線の先、蛙が潰されたような悲鳴をあげて太った男が脂汗を滲ませる。

「山田屋様！」

しかし勝ち誇ったような声に振り向くと途端に意地の悪そうににやりと笑う。

「よくやった」

薄笑みを浮かべるその浪人の腕には、悔しそうな表情の娘が抱えられていた。

「雪ちゃん！」

「悪く思ふなよ　こんな所に女を連れて来たお前が悪い」

しかし微動だにしない黒眼。ざわりと冷えていく汗を垂れ落ちさせまいと唾を飛ばして脅し立てる。

「全員剣を捨てろ！さもなくばこの女の首が転がるぞ！」

娘の首にぐ、と生々しい刃が押し当てられる。娘は死を目の当たりにしてか血の気が失せ、男の方を見つめて震える唇が動く。

「天　」

「女？」

しかし遮るように男の口元はくすりと笑い、それから揺らぎもない黒眼で真っ直ぐ睨みつけた。

「てめえらに乞う命は持ち合わせてねえよ、俺たちの仲間全員がな！」

「な　くそおお！」

気迫にどたと押され、商人の男は倉庫に向かって我武者羅に走りだした。その自棄とも言える行動にち、と舌打ち即座に追いかける。

武器庫に入り込んだ山田屋は、手当たり次第にそこにあつたものを掴んだ。

「　何する気だ、やめろ！」

男が初めて顔色を変えて声を張り上げる。

山田屋が手にしているのは爆薬だった。銃器他火器爆弾の類が取り揃えられたこの倉庫、引火すれば忽ち爆発が爆発を呼び大爆発を起こしてこの建物ごと木っ端微塵となるだろう。そうなれば

「人がいるんだぞ！」

十数人の女達が仄暗い奥に亡霊のように浮かび上がっていた。

「ははは！どうせ死ぬなら巻き添えにしてやる。主人と死ねるなんて幸せだろう、商売道具もな！」

「道具……だと？」

黒眼が眇められるが、死に瀕した男は狂ったような引き攣り笑いをあげて得意げに話し始めた。

「そうだ、奴隷制廃止の混乱に乗じてタダ同然の値で買い取った。これだけ隠すのは容易ねえからな……だが俺は賢かった。女郎屋として稼げばいい。それも裏の界限だ。客層は落ちるが承認に出す様な危ない轍は踏めねえからな」

「上玉揃えの上何してもいいってんで大繁盛、俺は数年もしないうちに金持ちに成り上がった」

「一生遊んで暮らせる金が手に入り　もうこの女共は用済みだった。それどころかバレれりや築いた金もばあだ。大体俺にはこんな人形もどき、薄気味悪かったしな。もう数は半分以下に減っちまっただが、残りのもまだ使えるうちに売っ払っちまおうと考えた訳よ。異国なら足もつかないしな」

「けどな、お上の目を？い潜って取引にこぎ付けたはいいが、出国までにはばれたらナシだってんで、結局浪人雇わされて金もちゃんちゃんだ」

「こんなことなら大人しく溝川に捨てとけば良かった」

「てめええ！」

低い声が唸り刀が抜かれると同時に、導火線にも火がついた。途端ぎくりと一瞬静まり乱闘を繰り広げていた者達も顔を青くして敵味方無く死に物狂いで散り散りになっていく。

「はははあ！悪足掻きだったな、小僧！」

女達に投げつけるように、爆弾が倉庫に放り込まれた。

「手遅れです、若、早く避難を！」

しかし最早其処に男の姿は無かった。顔を青ざめた者が目にしていたのは……

間髪入れずに倉庫へと飛び込んで行った男の背だった

「若　　ッ！……！」

「ははははははは！」

狂った甲高い笑い声が響く中、皆頭を抱え地に伏せる、そして無情に

爆発音が聞こえた

八・天女の涙

続く筈の、爆発音が続かなかった。未だ赤煉瓦の建物はその形を保ち、その中也炎上している様子はない。

恐る恐る顔を擡げた者がその奥を凝視する。黒い塊がそこにあった。

「まさか若、体で爆弾を抑えて……？」

ぐ、と手を床につくのが見えた。生きてる、そう安堵した時、だがごぼりと血を吐き起き上がることなくどさと地に落ちる。見れば腹下一面が血溜まりになっていた。

「天！」

女がた、と駆け寄ろうとしたその時に、

「まずい、山田屋を抑えろ！」

そう叫んだ時には遅かった。

女の声にはつとして先じた山田屋が、血の上に伏せる男の黒髪を掴み上げる。異国製の小型拳銃を当て、蛙のような大口をにんまりと吊り上げた。

「動くなよ　お前らの頭の命が惜しかったらな！」

「ここまで腐った人間がいるとはな！」

悪態を吐きながらも誰も動けなかった。

「……ま……ろ、」

呻いた男の頭を、ああ？とぞんざいに上げさせる。

「……まに、耳は無かつ、たか……」

「ああん？耳がなんだ、切り落として欲しいってか？」

ぐすぐすと笑った山田屋の顔に、ぺ、と唾がかかった。

「てめ、えに……乞う命は、ねえんだよ……蝦蟇野郎……！」

小馬鹿にしたような不敵な笑みに蝦蟇口の男の浮腫んだ顔にぶちぶちと青筋が浮く。

「小僧が、死に言葉は選ぶんだつたな！」

逆上した山田屋の指が引き金を引く　男は黒い眼を静かに閉じた……

パン

呆気ないな、人の命は……　ごめんな、

「天、」

鈴が鳴るように透き通った声がする……ああ、此処は
瞼をゆつくりと開ける。目の前にはふわりとした純白の布。

「駄目です！」

真つ白な西洋服の女が、庇うように手を広げていた。

自分を殺したはずの男は顔を歪ませてだらりと落ちた右肩を押さえ、拳銃がその下に転がっていた。鮮血がばたばたと落ちる。

「なんだ、この女……！」

憎憎しげに毒づいた男の振り上げた左腕が、しかし「捕らえる！」という号令と共に背後からがつと掴まれてそのまま数人の男に取り押さえつけられる。よく通る男の声がした。

「山田屋五郎座衛門 異国間民商取引における重度違反未遂、第四種商業認外営業、及び国定被保護者の強制不当労働の大罪により、お上より任を賜りし霧崎の名において貴様を捕縛する」

白い軍服姿、刈り上げた髪と厳しく結ばれた口元が凜々しい。

「あれはまさか……霧崎現当主様の片腕とも言われている、官正二位外衛門府頭之大臣」

「霧崎与助竜之介様だ」

遠くなりそうな意識の中、白いレースのボンネットから流れ落ちて銀色の髪が煌くのをぼうつと見ていた。

「あんた……何で、」

「天」

振り向いて、貴婦人が膝をつくなり黒髪の男をぎゅ、と抱きしめる。

「とても……とても会いたかったです、天」

空色の瞳からぼろぼろぼろと、雪に乗る雫のように白肌に涙を零す。

「とても痛い……」

「大丈夫だ」

男は優しい表情になって、慰めるように貴婦人の頭を撫でた。

「なんだ、あれ」

「若があんな表情するの、初めて見た……」

「元婚約者とか、か？」

遠巻きに一連の光景を見て呆然としている仲間達に影郎がふ、と笑って答えた。

「いえいえ、あの方は」

「これはとてもいけません。すぐにお手当をしなければ、」

「舐めとけば治る」

「え、それは本当ですか」

言うなりペロ、と血の付いた頬を舐めるので、顔を背けやれやれとため息を吐く。

「全く、相変わらずだな」

しかし、仏頂面は少し赤みを差していた。

「母さんは」

「母親　!!?」

一斉に驚嘆の声が上がる。

「嘘だろ、あんなに若いのに」

「てかどう見ても異人だろ。若って何者だよ!？」

「だけど、初めて見た」

「ああ」

ほうと溜息が出る。

「天女のようにだ」

皆取り憑かれたように一心にその美しさを見つめていた。

「天、お母さんと一緒に帰りましょう」

「悪い、母さん　俺はもう……」

握られた手を外す。涙を孕んだ空色に映らぬように、自分の顔に手を翳した。真紅^{まゐか}の血がぼたりと目元に落ちて頬を伝う。

「落ちねえよ」

膝元、目に映った口元だけは微笑して、黒い瞳にゆっくりと瞼が落ちていった。

まるで安らかな眠りにつくように

八・天女の涙（後書き）

更新遅れましてすみません！

*話毎の題変更しましたが内容変わりません。

九・寢覚

「……う、」

男は目を覚ました。

質素な低い天井が見える。いつもの布団にいる。

何か思い出せない悪夢を見ていたような……………

「若アッ！」

頭に響く大声に、う、と顔を顰める。

「静かにおしっ」

「天、」

二つ女の声が聞こえて、手がにぎゅっと暖かい体温に包まれた。見上げれば、その名のように白い顔の女がいる。

「……雪、」

それだけでない。布団の四方を隙間無くぐるりと人に囲まれている。

普段は布団を一つ敷くだけの小狭い部屋に十人がぎゅうぎゅうと収まっている。

重い体を寝かせたまま、男はぼんやりとその面々を見渡した。

「影郎、咲、長十郎、佑助、佐助、以蔵、与太郎、吉之助、雪、俺は……」

疼くように頭を押さえた後、はっと反射のように体を起き上げらせる。

「あの人達は！？無事だろうな」

腹に巻いた包帯にじわりと赤く血が滲み、思わぬ激痛にう、と顔を顰める。

「安静にして下さい、若　無事です、若が体を張って守ったお

かげでね」

微笑んだ顔にほつと溜息を吐く。

「でも、今回は無茶すぎですよ」

「ああ、頭にしては冷静さを欠いていた」

「なんだよ長十郎、お前ならあの時どうしたって言うんだよ。別に助ける方法があつたつてのか」

与太郎に向かって、そうじゃねえ、とちょっと考えこんでから口を開く。

「今回の件、事は急ぎだったとは言えどうも下準備が疎かだったんじゃないかと思う。余分な血は流さないつてのが若流儀だったのに、随分派手に喧嘩をやらかした」

「そうですね、今考えれば正気じゃないですよ。お尋ね者が正面堂堂憲兵の巢窟に乗り込んで、お縄に捕まって当然、下手すりゃ今頃あの世にいたつておかしくない。若の大怪我一つで収まったのが奇跡な程です」

「おいおい二人とも、やめろよ」

「いや、頭を責めてるんじゃない」

「いや責めてますけど、それにしてもなんというか」

「若らしくない」

「……………すまねえ」

ぽつりと男が呟いた。

「それじゃ済ましません。皆若に命預けてんですから」

男は一度目を閉じ、そしてゆっくりと開いた。

「俺の母は……………扇子だった」

はつと皆口を閉じる。

それきり皆、何か言いたげにしながらもじつと押し黙っていた。しかしとうとう沈黙を破って長十郎が誰にともなく口火を切る。

「 奴隷制……その崩壊は、一人の男が扇子を手にした事で始まったと言われる」

「男はその美しさの虜となったが、婚儀前には『もの』としてその命を奪うするのが貴族の定めだった。しかし男は扇子を『人』として自分の妻とする為に、掟を犯した いや、掟そのものを壊した」

「その貴族の男というのが、当代君臨するあの霧崎千次様だ」
また不自然な沈黙の後、耐えかねたように「ああ、くそ！」と声
が上がる。

「どういうことなんだよ、若！あんたは……」

瞬間、伏せていた男は頭横に鋭い視線を投げかけた。影郎は平然として答える。

「私は何も言っていないですよ。ただ、若が気を失った後 その霧崎様御本人が見えられて直々に事態の收拾を測られました。それと、

「
影郎が目線を移した先、枕元には丁寧に畳まれた包帯があった。
今男の顔を覆い隠すものは何もない。

左顔には縦に一文字、刃物で切裂かれたような傷跡があった。だがその傷を除けば歌舞伎役者と紛う目元涼やかな顔立ちをしていた。そしてその顔は

「霧崎様に瓜二つだ……」

ち、と苦々しく舌打ちする。

「だから何だってんだよ、好んでこんな顔に生まれた覚えはねえ、好んであんな家に生まれた訳じゃねえ」

「生まれが関係あんのかよ」

腹の包帯にまた鮮やかな血が滲むが、痛みも感じていないような

氣迫で鋭く睨んだ。

「　　そうかもしんねえけどよ、」

拳にぐ、と力が入れた男が投げ捨てるように言葉を吐く。

「俺んちは、食う飯がなくなつて姉ちゃんも妹も売り飛ばされた……でも貴族は異人の為に豪華な建物をおつ建てて、酒やご馳走を振舞つては連日踊り狂つてゐるって言う。なんでなんだよ、なんでそんな奴らが上に立つてゐるんだ！」

いきり立った男をちらと横目で見て、普段は寡黙な男がぼそぼそと呟く。

「……俺の母親は目の前で貴族に殺された……通りで土下座できなかったからだ。陣痛を起して結局子供も流れた。　　俺は貴族が憎い」

「皆だつてそうだろ！貴族が憎くない奴がいるのか？」

「悪人が横暴しても役人は見てみぬ振り、弱い者から金だけ奪り取つていくだけだ。貴族は市街の状況になんかてんで無関心で安全な堀の中で蝶よ花よと遊んでゐる。俺達平民なんか、虫けらだと思つてゐるんだ」

「諦めていた、怒りを持った所でどうにもならない、余計に腹が減るだけだ、つて。理想語つても今日食う飯がなくちゃ死んじまう」

「　　けどよ、貴族はいらないうて、正面切つて言う男に会つた」

「人は皆人だと言つた。貴賤男女などないと言つて、奴隷だった女を蹴飛ばした役人を投げた。ついでに俺まで投げられた。弱い者を見て見ぬ振りをしてゐたのは、俺自身だったと気がついた。　　俺はその男についていった。この男は絶対に死なせちゃいけない、ひよつとしたらこの国を変える男かもしれないと思つたんだ。そして、俺もその為に生きたいと思つた。思つてきた……」

「なのに……なんか、分かんねえよ。分かんねえけど、裏切られた。勝手かもしれないけど、ただ仲間だと思つてたのに、俺達と一緒に

で貧しく生きて貴族に恨みもって、それでそんなに強く生きられるんだと思つてたのに」

「なのに、何不自由ない貴族のぼんぼんだつた、てなんだよ」

「捕まつたつて家の力があるから怖いもの知らずだつたつてだけのことなんだろ。包帯なんか、家出で顔隠してただけなんだろ。あんたにとつては、遊んでただけなんだ！ 命預けるなんて勝手に意気込んで、馬鹿だ、俺は……今まで若なんて言つて慕つてきたのが、大嫌いな貴族だつたなんて……」

再び、誰もが口を閉ざし居辛そうにしていた。皆、怒りよりも混乱と失望が見て取れ、誰も何も反論しないのは先の言葉がその気持ちを代弁しているか、あるいは覆すに至っていないことを表していた。

「ついて来いなんて、言つた覚えはねえよ」

「ごろりと男は寝て言つ。」

「若と呼んだのも住み着いたのも、お前らの勝手だろ。さつさと勝手に出て行けよ」

一瞬しんとなつて、それから一人立つて出て行つた。

「ちよ、ちよつと、吉さん ねえ、皆！」

娘が呼ぶが振り向くことはなく、助けを求めるように後ろを向いても皆気まずそうにして、追いかけるでもなく出て行くでもなく座つていた。

「さあ、皆出て行くよ」

「咲さん！」

「なんだい。忘れてるようだけど天は死にかけたんだよ。いつまでも居座っちゃ休まらないだろ、帰った帰った」

そうばんぱんと手を叩くと、皆ちよつとほつとした様子で腰を上げて出て行く。どうとも決めかねて動けなかったのだろう。

「ほら、影郎。あんたも出て行くんだよ」

「いやあ、女人は強いですねえ」

この男だけは相変わらずのくだけた口調で、尻を叩かれて出て行く。雪もそつぽを向いている男を最後にちよつと見て、静かに襖を閉めた。

十・赤飯

土間前の座敷、皆一かたまりに囲炉裏を囲んでぼーっとしていた。やはり誰も何か喋ったりはしていない。

そこに影郎、咲、雪も入ってきた。

「ねえ、今日は奮発して赤飯にしようか、天が目を覚ましたし！」

明るく娘は言うが、皆思い思いに耽っていて反応は薄い。代わりに隣の二人が返事を返した。

「あ、いいですね。まあどうせ若は食べれないんですけど」

「あたしが粥にしてやるよ、食わなきゃ治るもんも治らないからね」

「……あんた達、何でそんな普通なんだよ。知ってたのか」

「まあ、私と雪ちゃんと、あと多分咲さんも知っていましたよ」

「この際訊くが……：こういう繋がりなんだ、その、あの人と」

「私は若の元従者で、雪ちゃんは若に甘く苦い初恋の味を教えた遊女です。咲さんは若が初めて人を斬った時に纏わる人ですね」

てきばきと軽い調子で影郎が答える。

「ところで皆さん、出て行って言われてましたがどうするんですか。まあ赤飯だけ食べて出て行くのも手でしょうが」

はあ、と皆憂鬱になり思い思いに溜息を吐く。

「私は……」雪が口を開いた。

「天は、遊女の私を遊女のように扱わなかった……三年ぶりに会った天は、なんだか怖くなったと思った。だけど、包帯なんかしても、顔なんか見なくなっただけで天だって分かった。天は昔から不器用で口下手で、でも真っ直ぐで、うまくいえないけど、天はどこにいても天だから」

「あたしは天が好き！」

叫ぶように言って、雪はぼろりと涙を零した。

「俺だつて　赤飯、食いてえよ」

ぼつりと零れたように与太郎が呟く。

「……実はさ、俺も結構でかい商家の三男坊だった。けど騙されてかなりでかい借金を背負っちゃまって、交換条件で妹を嫁がせることになって……別嬪な妹だったから後から考えればそれが狙いだっただろうけど」

「けどさ、団子屋で相席になった男に泣き言言ったら投げられたんだよ。てめえが嫁に行けよ、てな」

思い出してちよつと情けなさそうに与太郎は笑う。

「ああ、あれは面白かったですよねえ。結局若が妹さんに化けて証文を押さえたんですが、その後暫くご機嫌斜めで大変でした。何でも男だとばれたのに襲われそうになったとか。まあ団子屋貸切の謝礼を受けてころつと機嫌直してましたけど。夕飯の代わりに団子をたらふく食べるのが若の密かな夢でしたからね」

「ここだけの話、白粉しろいを塗って傷も隠れた若は妹より別嬪だったかな、気持ちもおつと。まあ兎に角、俺は恩もあるが『若』の男気に惚れて付いて来たんだ。若が誰様だろうと若に変わんねえよ」

「雪ちゃん、赤飯一個追加ね」

「にこりと影郎が笑つて言う。
「俺たち双子の夢は、都一の花火師になること。けどこんなしけた世の中じゃ花火も上がんねえ」

「だから、しけた奴らはぶつとばしてからだ。俺らは若の腕っ節に惚れたね」

佑助と佐助もにかりと笑う。

「俺は意見書出してぶちこまれたんだが……頭に脱獄させられたんだよ。引き籠もってんじや唯の愚痴だつてな」

「俺は道場じゃ食えなくなつて狼藉働いて、若に斬られた。弱いから人が来ねえんじやねえかつて言われておまけに手当てされて、なんか泣いちまつて、結局そのままいついちゃまった。俺はまだ、若の下で自分を鍛え直したい」

長十郎、以蔵も口元を緩ませた。

「じゃ、えーと。赤飯九人前、」

「十人前！」

え、と見ると玄関から入ってきて土下座した男がいる。

「俺も！……若は俺達の若だ。貴族の若なんかじゃねえ！」

半分泣きべその男は、顔に青痣ができている。

「どうしたんだ、吉助！」

「いや、その……」

「大方、姉さんと妹にぶたれて追い返されきたんだらう」

「なんだ、いいこと言うと思つたら受け売りかよ」

ははは、と笑い声が上がる。

「いや、でも！本当に俺の気持ちだ。さっきは、俺は短気だからよ

……でも、俺も姉ちゃんと妹の恩だけじゃなくて、若が好きなんだよ！だから、なんか驚いちゃまつて……でも、」

もごもご口ごもる吉之助の様子に笑つて、ぱんぱんと影郎が手を叩く。一味解散となるかという程の重苦しい空気はどこにいったのか、すっかりいつもの雰囲気だった。

「皆さん、告白なら本人にして下さい。ちなみに食事後をお勧めします。斬られた後じゃ赤飯も食べられないでしょうからね」

あつはつはつと笑い声が響く。襖を隔てて、布団の中の男が寝返りを打って呟いた。

「しるせんどう……」

十一・役目

男はぼりぼりと沢庵を噛みながら、大量の焼魚を眺めていた。

一騒動後の翌朝、膳に運ばれてきたのは赤飯のおかゆに沢庵、大根のみそ汁、そして焼き魚。男は微妙な表情をした。滅多に出ない魚が出るのは嬉しいことだが、

「おい、何か量がおかしいぜ」

十匹もの魚が乗った大皿を差し出して、小雪はにこにこ満面の笑みでいる。

「それはね、皆の気持ち。天に早く治って欲しいから、たくさん栄養つけてね！」

「気持ちだけ受け取って置こう」

やれやれと軽く溜息をついて、一匹だけ椀に移すと魚をほぐしはじめた。

「ところで咲さんは、なんで若が貴族だって知ってたんですか」

「匂いだね。育ちなんか隠す方がよっぽど難しいもんだよ。不良の言動してたって品のいい男の匂いは骨からするもんさ」

「ああ、若、そっぴや魚の骨の残し方はやけに綺麗だからなあ」

女はぷつと吹きだした。

「まあ当たらずとも遠からずってところかね」

「……………」

男が黙々と魚をほぐし続けて、小山ができている。

「わー、すごいね」

「お前が食え」

作業を続けながら笑いもせず放った言葉に慌てて手を振る。

「こんなに食べれないよ！」

「その言葉、そのままそっくり返してやるぜ」

ほぐした身をつまんだ箸を、ぐい、と雪の口前に持ってくる。

「食え え、え？と娘は吃驚したように目をぱちぱちした。

「何なら口移してもいいんだぜ？」

悪戯な口元が艶だった。娘は一気にぼつと顔を真っ赤にする。

同時にどたと襖が倒れて、男達が雪崩のように倒れこんできた。

「ほら、押すなっていったら！」

「だってよく聞こえなかったでしょう」

「……何してんだ、てめえら」

「こっちの台詞だぜ、若。なーに朝っぱからいちゃついてんだか」

「いやでも魚の口移しはねえだろう」

「台詞は色っぽいのに、なんか残念だよな」

「天然で呆けるのはお母上似ですかねえ」

「全くお前ら、ここは立てるもんだぜ。 流石若、魚剥くのが巧

いなあ。 よっ色男！」

「出て行け……」

「あ、若、顔赤い！」

「照れてる！」

「うるっせえよ、早く出る！」

男達は追い出されて、雪も半ば苦笑でそれに続こうとしたが、手首が捉えられる。

「雪 今夜来い」

一瞬なんだろうと思ってから、勝手に顔が真っ赤になった。

茹蛸のようにふにやふにやしなから、襖をしめる。

でも、あの天だし。と思った。それに大怪我中　と考えて、自分は一体何を考えているんだと恥ずかしくなった。娘は気を取り直して庭掃きに向かった。

「元扇子の密輸未遂の件ですが……」

屋敷、異国人取り締まりを任されている霧崎分家の者が、本家当主に報告をしていた。

「倉庫内には、他に取り決め以上の銃火器類、それと　阿片と思われるものを確認しました」

執務机、頬杖を付く男は何も言わないが黒い瞳だけを眇める。

「それについては今回の騒ぎに乗じて没収処分しましたが、現時点でそれら条約違反の人物及び国すら特定は難航しています。今回首謀者とされる山田屋を拷問はしましたが、仲介人すら行方を眩ましている状況です」

「そりや見つからねえだろうな」

気だるそうに、男は息を吐く。

「　　どういうことでしょうか」

「銃器倉庫を国別にしなかったのは、互いを牽制させる意味も含めていたな」

「……複数国による秘密協定でも結ばれているということですか」

「さあな」

「ではその線で調査を進めます」

「無駄だ」

「しかし、そのままでは　」

「特定が無駄と言ったんじゃないよ。結んだところで無駄だということだ。勝手にやらせとけ」

「しかし、」

「国は人だ」

男は何か面白気に口端を上げて、真っ直ぐに黒い瞳を向ける。

「この国に人がいる限りこの国がこの国でなくなることはねえ」

「お言葉ですが　近頃異国への出国願いを届け出る貴族が益々増えていきます。　恐れながら、まるで崩れる家から逃げ出す鼠のよう」

沈痛な面持ちで思い切ったように進上するが、くす、と主は笑う。

「鼠が出て行くなら止める奴もいないだろう」

「私が言いたかったのは、この国が酷く不安定な状況にあるということ。外政も内政も……役を司る者すら皆己の事ばかり。国を捨て異国での身分を得ようと影で国金を流用して異人にごまをすっている。最早この国は旦那様の腕一本に支えられていると言って過言ではありません」

「いや、俺の腕二本とお前と川野の指一本ずつだな」

くすくすと可笑しそうに男は笑っている。

「全くもついい加減に腕が痺れてきた。安らかな眠りにつくのが待ち遠しいぜ」

「そんなことを言わないで下さい。お力になれず恐縮ですが、旦那様の代わりを務められる程の人物など……　せめて天様がいらっ

しやれば」

「いるだろ」

男はなんとも読めない微笑をしていた。

「　やはり先の件、浪人衆の頭目と見られたのは若様。どうしてお見逃しになられたのですか。賊人などに身をやつされて……もうお許しになって下さい」

「あのなあ、あいつが勝手に出て行っただぜ。俺に当主は無理だとかほざいて」

ぎいと椅子に背を預ける。

「近頃都では紅狼衆と名が通り強きを挫き弱きを助くと評判のようですが」

「義賊被れの頭首で随分楽しそうにやつてるじゃねえか。全く羨ましいぜ、その器の小ささがな」

「しかしやはり若様も国に憂い、民を想う気持ちは同じということ。今こそ呼び戻しになられる時かと存じます」

「やけに食い下がるな、竜。 どうせ瑠璃に泣きつかれたんだろ」

「……仰る通り、瑠璃様は若様の安否に非常に非常にお心を痛めています。若様が元服されるまでお一人でお育てし、別邸にて母子として二人で暮らしてきたのですから当然でしょう」

「おい、俺もいたからな。 まあ、育ててはねえが」

「お帰りになるのは稀だったと聞いています」

「分かつている、だから振られたんだろう。 それよりお前、自分の妻に様づけか？前は俺の前でもるりり呼び捨てたくせに」

男はぼんやりと空を見上げた。その横顔は雨が降りそうな雲を憂うような。竜之介はきつぱりと訴える。

「るりの為に御子息を戻してください」

「前置きが長えんだよ、竜之介。それ言いになわざわざ顔も見たくない俺のところに来たんだろう？」

目を戻してふ、と男は笑った。

「だが断る」

「るりが泣いています」

「慰さめ方が足りねえんじゃないのか？あとは噛み方が」

「旦那様！」

「もう帰れ」

「……天様は、こちらで行方をお探します」

「そして崩れる家に押し込むのか？」

「俺が崩させません」

「残念だがお前は異国に異動だ。大使としてな」

「な、旦那様」

「瑠璃の母国だ。……まだ見たこともない。連れて行ってやれ」

「それでは！一緒ではないですか。俺は逃げません」

「お前は国と自分の女とどちらが大事だと思っている」

「それは 較べられるものではありません。市井の者ならば思うとおりになっても、国の上に立つ者は国を守る責務があるのですから」

「馬鹿だな、お前は。女に決まっているだろう。国とは人の為にあり、男は女の為にある。だからこの世の全ては愛する女の為にある」
「ですが、ならばこそ家である国を保つのが男の役目ではないのですか」

「建てるのだって男の仕事だろう？」

男は不敵に微笑する。

「貴族なんかいらねえよ。この霧崎諸共な」

十二・流星

「あれ？皆どこ行くの、お仕事？」

皆揃ってそろそろ出て行くのを見て、下駄を履く影郎の袖をちよつとひっぱって訊く。

「いや、銭湯だよ」

「天は？」

「いやあ勿論置いていきますよ、鬼の居ぬ間に銭湯ってね。普段は若が怒りそうなあんなことやそんなことに果敢に挑戦するつもりです。雪ちゃんも早く支度しておいで」

「え、でも 天が一人になっちゃう。怪我してるのに、」

「あ、そう？じゃあ雪ちゃん、若のこと宜しくね」

にこりと笑って影郎は立ち上がる。

「その後宴会なので。まあ、明日の昼には帰ります」

「へ？ちよつと、ねえ」

草履を履く間もなく、そのまますたと出て行ってしまった。

「あんた達、酒の飲み較べであたしに勝てると思うんじゃないよ」

「いいや咲さん、悪いがそれにかかけちゃ譲れねえな、男の沽券にかけて」

「言ったね。よし、あんた達、今夜は男を見せてみな！」

前で何らやおーっと歓声のような雄たけびが上がった。久しぶりの酒と言うので皆大いに盛り上がっているようだ。男達のその背を見て、影郎はにこりと微笑む。

「これができる従者というものです 貸しにしますよ、若」

「ねえ、何か皆銭湯に行っちゃって。明日のお昼頃に帰ってくるって」

「はあ？一夜中浸かってるつもりか」

体を拭いていた手をちよつと止めて、男が怪訝な顔をした。腹は包帯巻きだが布団から起した半身は衣が肩から落ちてゐる。細身に見えて筋がついてしつかりと固そうな身体。襖を開けた時にどきりとしたがこの男所帯では見慣れた光景なので、今更恥ずかしがるのも恥ずかしくてそのまま桶の後ろにちよこんと腰を降ろす。

「あ、その後酒飲むって」

「ふーん……」

ぽいと濡れ布を桶に捨てて、ぽちゃんと水が弾く。あ、拗ねてるかも、と思つたが口には出さずに口だけちよつと緩んだ。

「……何笑つてんだよ」

そしたら軽く睨まれてしまった。

「天の分のお酒、て影郎さんが置いてつてくれたよ。飲む？」

「へえ。珍しく気が利くな、持ってきて来い」

+

「はい、どうぞ」

「ああ」

猪口に入れられた清酒を、しかしちよつと見つめたままだった。

「どうしたの？」

「お前が飲め」

「え、何で」

「影郎の置いていった酒だろう。信用ならねえ」

「それ、あたしに毒見しろってこと？」

「そついうことだ」

笑いもしない顔で本当に猪口を差しだしてきた。むう、と思ひながらも受け取り少し自棄になつて飲み干す。

「はい」

空になったのを返すと、くす、と男は笑った。

「いい呑みっぷりだ」

「まあ、注ぐのも注がれるのも仕事でしたから」

そうしたらふいと窓を向いてしまい、あ、しまったなと思っても遅くて気まずく、何か何かと話題を探す。

「あの、そういえば、今朝来いって」

「ああ」

ふいと流し目を向けて男は思い出したように手を伸ばし灯りを消した。真っ暗になる。真っ赤になる。

「え　うそ、そんないきなり、ちょっと天　」

「見る」

かたんと音がする。

「見ろって、そんな、何を　」

顔を隠し、しかしちらと手の隙間から覗いた。

「わあ」

流星群が夜空を飛んでいた。

「綺麗だろう」

暗闇から、まるで自分のものを自慢するように嬉しそうな声がする。

「うん、綺麗……」

手をぱたんと置いて、呆けて見た。

流れていく。流れていく。

漆黒を縫う金銀の夜空。

散りばめられた星達を駆け抜け駆け抜け散って行く。

最後は燃え尽きてしまつと知って飛んでいるのだろうか。

一瞬を燃える為に真っ直ぐに駆け抜ける星達。

何よりも美しい。だけど何よりも

「雪」

男が顔を覗き込む。初めて見る、どうしたらいいか分からないような不安気な表情をしている。

「何故泣いている」

触れた指の腹に涙が乗っていた。剣を持つ手と思えない程、綺麗な指をしている。

「死なないで」

唐突な言葉に男はちよつと驚いた顔をするが、しかしすぐにふつと笑った。

「死なねえよ」

ぎゅ、と男の衣を手に掴む。縋る様に見上げた。

「じゃあ、もう」

唇が塞がれた。

「好きだ、雪」

「あ、」

髪を捲り上げて首筋に口付ける。その吐息を漏らした小さな唇に触れる。小さな手のひらが邪魔をした。

「天はどうなったのですか、りゅう」

男は顔を離して、しかしシーツの上自分の下にいる女をしっかりと見つめた。

「旦那様と呼び戻す気はないって。だけど僕が探すから」

「そうですね……ありがとうございます、りゅう」

哀しい顔をして、それから微笑んだ。もう再び口付けようとする

と、小さく唇が開く。

「旦那様は……なにか、るりのことは言っていましたか」

「旦那様は」

男は身を起した。

「僕と瑠璃に、異国に行つてほしいと言つたよ」

「え」

女は眉を八の字に下げた。酷く切ない顔をしている。

「そうですか……るりをもう……」

「どうする？るりが残りたいのなら残つていいんだよ」

銀色の髪を優しく撫でた。

「僕は行かなきゃならないけどね。大事な事を任されたから」

「るりは　るりも、りゅうと行きます。旦那様がお望みなら……」

「そう」

男は髪に口付けた。その隣に横になつて、手を握つた。

「ねえ、るり。嫌なら嫌つて言つてくれたらいいんだよ。僕はるりが好きだけどるりが悲しむことはしたくないんだから」

「嫌ではありません、とても嬉しいです。るりはとても好きなのです」

きゅ、と男の首に折れそうな白い腕が絡みつく。

「るりはお人に抱いていただくために生まれたのですから」

「るり、何でそう悲しいことを言うんだい」

「りゅうは悲しいのですか」

「悲しいよ、るりがそんなことを言つたらね」

「ではもう言いません。旦那様は喜んでくれたのですが」

「それが僕の名だったら、僕も喜んだよ」

「りゅうが好きです、りゅう」

「ありがとう」

男はまだちよつと悲しそうに微笑んで、それから額に口付けた。

「るりの気持ちは何でも言つてほしい。一番大事にするから。だから嘘は吐かないでほしい。一番悲しいから」

男は手の甲を持ち上げて甘噛みした。

「では……りゅう、」

「何でも言って」

「もう少し……強くに噛んでいただきたいのです」

「そうなんだ……本当に」

男は微妙な表情で笑った。

「もっとつよく、たくさんに……るりをあいしてください」

十三・すももと橙

「どういうことですか、若！」

ばんと畳を叩いて影郎が厳しい目を向けた。

「何もしてない、てなんなんですか。本当、若にはがっかりですよ。ちゃんとついてるんですか？」

「なんだよ、帰って早々うるせえな……どうせならもつと遅くに帰って来いよ、後百年程」

「あーあー、折角若がその気になるように酒まで用意したのに、一口しか飲んでないなんて」

「一口飲んだのは雪だ。なんだよ、その気って」

「もういいです、疲れました。若の意気地の無さを計り損ねた私が悪かったです。ああ情けない」

男はちよつとむ、として言った。

「何もしてないなんて言ってねえだろう」

「え、でも雪ちゃんが」

「女にそういうことを聞く奴があるか。本当にお前は最低だな、恥らうに決まっているだろう」

「あ、なんだ。そうでしたか、すみません」

影郎は申し訳なさそうに頭をかく。

「何せ若は遊郭に通い続けた拳句に振られ、以来女に興味なしという経歴なのでこのままだとそっちの道に誤ちかねないといつい心配をして、ほんの親心が働いてしまいました」

「てめえの存在ごと否定したいところだが、先ず俺の親は母さんだけだ」

「ああそうですか。ちなみに女に母親のことを持ち出すと敬遠されますからお気をつけて」

はいはいと言って影郎が立ち上がる。

「礼は言わなくていいですよ、若」

「何のだよ？」

影郎は意味ありげに笑ってからしかし答えずに襖を閉めた。男は当惑する。

「意味の分らない奴だ」

+

「どういうことだよ、雪ちゃん！」

ばんと畳を叩いて男達が打ちひしがれた。

「いないと思ったら、若と一つ屋根の下に残ってたなんて」

「そういうことか、あーそういうことか！」

頭を抱えて大声を出すともかく。

「うるせえぞ、佑助佐助……頭に響く」

二日酔いか頂垂れている者が多数。

「えっと、」

娘がどうしたらよいか戸惑っていると、からんと襖が開く。背がびくとするが、影郎だった。

「おい、影ー」

ゆらりと矛先が向かう。

「てめえ、謀ったな！」

「わ、なんですか！」

組み敷かれてどたんばたんと埃が立つ。

「おかしいと思った！何で急にへそくりで酒を振舞うとか言いだすのかと思ったら、」

「若に握らされたのか？吐け、この野郎！」

どすどすと腹が蹴られる。

「すみません、すみません、若に脅されて仕方なく……所詮私は若

に言いなりの憐れな従者風情なんです!」

「嘘つくんじゃないよ!」

げしん、と思い切り顔が踏みつけられた。

「天があんたみたいに狡い真似する訳ないだろう!」

「うっ、咲さんまで……酷い。私を信じてくれる人はいないんですか」

首を伸ばして娘に助けの視線を送った。ちょっと困った表情をして、口を開いた。

「天はそんなことしないと思う」

がくりと頭を落とす。

「大体酔わせて襲わせるなんて、本当、最低な男の発想だね」

「襲われてないです!」

殆ど叫ぶような声に、皆注目する。娘は真っ赤になった。

「天とは……そういうことは、してないです」

「本当かい」

咲が鋭く見つめる。

「一晩二人つきりでいて、何もなかったっていうのかい」

「え、と……」

女がもじもじとする。そして襖が引かれた。

「てめえらしい加減にしろよ」

男が立っている。

「若……」

眉の険しい様子に皆しんと黙って、男はそれから娘の傍に行き肩を寄せた。

「俺と雪は夫婦の契りを結んだ」

「え！」

と一番驚いたのは、娘だった。それに合わせて男も怪訝に娘を見る。

「は？」

互いに驚いて見合い何か噛み合わない様子に、皆もごくりと見守っていた。

「それはしてないよね？」

「な……！お前、忘れたのか。昨夜……」と男は顔を赤らめて続かない。

「……口付けは交わしたけど」

「馬鹿！お前そういうことを人前で言う奴があるか」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「はあ」

遂に誰かが深い溜息を吐いた。

「接吻で夫婦って……」

「若がここまで酷いとは思わなかった」

「なんか怒る気も失せたぜ」

「やれやれと皆首を振る。」

「貴族ってこんなか」

「いえいえ若は特別仕様です」

「じゃあ昨日のはなんだったんだ!？」

「ただの男女の戯れですよ、若」

何か憐れそうな目を向けて影郎が諭す。

「……ただの、じゃないよ」

ぼつんと、雪は頬をすもも色に染めて男を見上げた。

「結婚……してくれるの？」

「……………」

男は考え深げな顔をした。

「いや、何でそこで迷うんだよ若!」

「同じような事があって痛い目にあつたのを思い出しているんですよ」

影郎の声に雪は途端に泣きそうな顔になって訴えた。

「本当に、千次様には娘のようにしか思われてなかったから!」

周りは騒然とする。

「千次様って……まさか霧崎家の現当主様か!？」

「凄え……て、そついや若なんか息子なんだよな」

「なんか信じらんねえな、本当なら俺達同じ場所に立ってるだけで斬首もんだぜ」

「それどころか同じ釜の飯食ってんだからよお」

「でも何で雪ちゃんか？」

「今の霧崎様は、賢君玉に傷とは顔の良し、と云われる程の女誑^{たら}らしいからな……顔さえ悪けりや歴代一の治世者だつて学者が嘆く」

「ああ、お顔が見たけりや遊郭へ行けとふざけられるが　そつか、雪ちゃんは郭出身だもんな」

「そついやあ昔……凄え絢爛な初見世道中があつたよな。噂じゃそ

の花魁を水揚げしたのは霧崎様なんじゃないかって言われてた」

「人ばかりで顔まで見れなかったが、まさかあれは雪ちゃんだったのか」

「となるとこりゃあ……」

「平たくまとめると、若が熱を上げた遊女は先に親父さんに奪われてて、若は失恋して家を出たってことか」

「平たく言わないで上げてください」

「……そんなんじゃないよ」

ぼつ、と男が言う。

「ほらー、若にも色々思うことがあったんですから。幾らなんでもそれで人斬りにはなりませんよ」

「親父は関係ねえ」力を込めて呟くと男は娘を見つめた。

「雪、俺と結婚してくれ」

「はい」

こくと頷いて、涙がぽろりと落ちた。
歓声が上がる。

「よっしゃあ、今日は祝いだ！」

「仕方ねえな、想いあつてるんじゃない仕方ねえな」

「一丁祝福してやろうぜ！」

「酒だあ！赤飯だあ！」

「三日酔いだあ！」

「やれやれ、だね」

外に出て一人女が壁に背をついた。じゃり、と石を踏む音がする。

「残念でしたね、咲さん。玉の輿狙えなくて」

声の方向を見て、女は小さく息を吐いた。

「馬鹿かい、あんたは。あたしを見くびるんじゃないよ」

「だってちよいちよい若にちよつかい出してたじゃないですか」

「だって惚れるだろ　でもあの娘が好きだったからなんだね、女郎一人助ける為に片目失えるなんて」

女は紅を塗った唇をふ、と上げて、夕空を見やる。

「ま、お似合いだね。二人とも純で。　天に違いは分からないかもしれないけど、所詮遊女と女郎じゃ月とすっぽんさ…… - せめて汚れちまう前に、出会いたかったよ」

男はじつと見る。

「咲さんは、いい女ですよ。私の出会った中で一番。　あなたを助けて両目を失ったら、私に惚れてくれますか」

「　馬鹿言うんじゃないよ」

橙色の涙が落ちた。

十四・三々九度

つ、と舐めると女は背筋を震わせた。赤ん坊のように白い背に、ただ桃色の短い筋が幾つか幾つも引かれていた。その痕をじ、と見つめる。

「るり、これは……」

「これは　るりが悪いのです」

「るりは悪くない」

「違うのです、るりはりゅうの思うようによい人ではない……るりはとても悪い」

女は座り直すと俯いてぼつんと話す。

「るりがいんなこと、旦那様のあいを奪ってしまったこと、それは旦那様をとて苦しめた」

「るりは淫乱なんかじゃないよ、それに、人から何も奪っていない」「りゅうには分からない……」

酷く哀しそうだった。

「るりの残ったせいで、全部よくないことになった。お仕置きの時、一番痛いのは旦那様だった。るりはそれが一番に痛かった……」

何も言わずに抱きしめた。それは全部自分の所為だと言いたくて、自分が幸せにできなかったからだと言いたくて、だけどそれはどうしようもできなかった。だから力いっぱい抱きしめた。女はむぐ、と言った。

+

白無垢に被衣を被った娘、黒い着物に袴を穿いた男、二人並んで座っていた。

白粉をしていますます雪のような女の肌、頬にはちよつと赤みが差

して俯いている。男は真つ直ぐ前を向いているがやはり面持ちは少し固く、緊張を見せないよう努めているようにも見えた。

「ほんと、初々しいなあ」

ひやかしつつ、皆目尻が下がっている。部屋には他に八人だけ。

「ところで結婚ってのはどうやってすんだい？」

「何、飯食って酒飲んで祝えばいいのさ」

「それはとりあえず三々九度をしてからにしましょうか」

男と娘が照れ合いながら酒を交互に飲み交わすのを皆顔を緩ませ見守る。

「ありがとう 皆、飲んでくれ」

仏頂面でない男の言葉に、皆杯を高く掲げて歓声を上げた。

「若と雪ちゃんの結婚に乾杯！」

+

あつという間に酔いが回り、がいやがいやと笑いに満ちて、酒を飲み比べたり、二人をひやかしたりと浮かれ騒いでいた。

「今どんな気持ちなんだい、雪ちゃん」

「なんか……信じられない、あたしが白無垢着れるなんて」

雪は少し涙ぐんでさえた。

「若がどうしてもって、この御時世に用意したんだもんなあ、よかったな、雪ちゃん」

「用意したのは私ですけどね、若は我俣言っただけで」

「ああ、ありがとう、影郎」

「初めて若に礼を言われた気がしますよ、季節外れの雪でも降るんじゃないですか」

「そうだ、若のこんな緩んだ顔見納めかもしれねえぞ。もっと酔わ

せろ！」

皆、あはははと笑う。男も一緒になって笑い、注がれる酒を受けていた。

「ところで雪ちゃんと若の初の出会いってのはどうだったんだい？ひと目惚れ？」

「喧嘩を売られたな……いや、その前か。街に出た時、男の脛を蹴る女を初めて見た」

ほろ酔いで酒に口を付けつつ男はくすりと笑う。

「え、雪ちゃん随分お転婆だったんだなあ　ていうか若に喧嘩売ったって？」

「聞きたい聞きたい、若と雪ちゃんの馴れ初め」

雪は恥ずかしそうにぼつと頬を染める。

「違うの、店で意地悪されて簪が買えなくて……でも天が助けてくれた」

「それで一目惚れ？」

「罪な男だな、若！」　ぴゅうと口笛が鳴る。

「その後遊郭で会って、でも天は連れ待ちなだけだから相手はいらない、てそっけなくて……その」

「水を出された。女を扱えないなら酒も扱えないんだろうつてな」

回想したのか可笑しそうにくすくす笑って男が引き取ると、誰かがまた口笛を吹き身を乗り出して聞きたがる。

「それでそれで？」

「忘れた」

素知らぬ風にぐらかす男を雪は悪戯な横目で見て口を挟む。

「押し倒された」

「何で!？」

皆驚くが、しかし仕返しになるところか男は逆にくすくすと笑った。

「その気もないのに男を挑発するからだ」

頬を触って言われれば娘は顔をすももにして俯き、沸く観衆に影

郎は茶々を入れる。

「どうせ若だつてその気もなかつたんでしょう、伊達の振りして口ほどにもない男ですからね」

むっとして男が睨めば何か言われる前におちやらけ調子で続ける。
「まあ今夜逃げる程の腰抜けではないと信じていますが」

途端にぱつと火傷したように男は手を外し、娘は娘でぱつと顔を真つ赤真つ赤にさせる。

気まずい空気が流れた　のは二人の間だけで、周りにはやにや笑いを噛み殺すのに必死の有様だった。

ぱんぱんと、絶妙の頃合で影郎が手を叩く。

「さあさあ、我々はそろそろお開きにしましょうか」

魚の身は食い摘まれて骨姿、他の肴も尽きて酒も杯に出ているだけになっていた。皆ぐびりと最後に喉を鳴らすと、各々腰を上げる。ふらふら足はおぼつかなく肩を担がれている者もいる。だが皆上機嫌で、「じゃ、若」と意味深な含み笑いでぱんと肩を叩いて行くのだった。

「後は若い御兩人だけで」

片目を瞑った余計な一言と共に、ぱんと襖が閉められた。

十五・白無垢

二人、沈黙してそのままいた。

所在無く杯に口をつけるが、ぐい、と煽ってしまつて空になり漸く男は娘に目を向けた。

「雪……」

瞳が濡れ酒酔いのどこもない倦怠さが男に色を持たせている。雪は弾けたように立ち上がった。

「あ、あの私、支度、支度してくるね！」

「支度？」

「ほら、これ着替えなきゃ。脱ぐの結構大変そう」

「手伝うか？」

「いいよ！咲さんに手伝ってもらうから」

「待て」

腰に手が伸び、何も言えずにすんと力が抜けて腰を落とす。

「脱がなくていい」

男の力で引き寄せられ、ときどきと心臓だけが鳴っていた。奥手かと思えば大胆で、こんなことは絶対言わないけどその艶っぽさはやはりあの人の子なんだなと思ってしまう。

「見せたかった……」

ぽつんと呟くのが聞こえた。

「……お母さん？」

「式を挙げられなかった。……白い服が好きだった。お前の白無垢を見たら、きっと自分のことのように喜んだらう」

「……うん」

「忘れてくれ」

「どうして？」

「女は母の話を好まないと聞いた」

「そんなことないよ、私だって……ねえ、私も話していい？」

「ああ」

「親の顔……覚えてないの。だから、だから　千次様のこと、お父さんがいたらこんな感じかなって、」

「本当言つと、小さい頃から好きだった……でもそれは、親への憧れだったんだと思う。千次様は、私よりも私を分かっていた。私の男がいるって　ねえ、不思議だね。天と結ばれるのを知ったらなんて言うかな」

「……こんな男は止めておけと言うんじゃないか」

男の微笑は本気なのか冗談なのか読み取れなかった。

「天は……千次様　お父上様のことは本当に嫌いなのか？」

「母さんと市井で暮らしていた頃……あいつは滅多に家に帰って来なかった。一度、それ程幼い頃だ……帰りを待っていた事があつた。目を背けられて、分かつた……俺がいるから親父は帰って来なかつたんだ」

「何故かは分からないが、親父が俺を見る時、何か恨みと哀しみが向けられている気がした。似てる似てると言われなければ、俺は本当はあいつの子でないと信じていられただろう」

「もしかすると、本当は俺はじいさんの子なのかもしれないと思った。親父はじいさんと仲が悪かつたし、じいさんは何故か俺に過度の期待をしていた。性格は祖父似と言われたしな」

「むしろそうだったら良かった……だけど母さんの態度を見れば絶対にそれはないと分かつた。あの人は嘘を吐けない人だ。それに、そもそもあの厳格な祖父が寝取るような真似をする筈がなかつたしな。……結局、分からなかつた」

「なんだ……天は嫌いなんじゃないんだね、それどころか　」
「言つな」

代わりに雪は男をぎゅっと抱きしめた。

「　　女は恐いな……」

「天　ちよつとだけ、私の事も恨んでるでしょ」

「……」

「だけどね、千次様は遊郭じゃ愛妻家で有名だったんだから。変でしょ？でも色好みだなんて、外の人達だけが言ってた言葉。千次様は子供のあたしに会いに遊郭に通ってたんだと思う。そして、あたしを可愛がってくれたのも本当は自分の子に向けたかった愛情だったと思うの」

「いや……」

男は微かに首を振った。

「親父は……母さんを哀しませる為に遊郭に行ってたんだろう」

「　え？」

「母さんだけは大事にする親父が何故浮気をするのか、分からなかった。浮気に何も咎めない母さんも分からなかった。……母さんは親父を愛してはいないんじゃないかと思う事があった。親父だけじゃない、母さんは　育ててもらってこんな事を言うのは仇だが、

「　愛されるのが親父じゃなくとも、愛するのが俺でなくともいような気がした」

「母さんは健気で直向き^{ひたむ}だった……だけど欲しいのは愛そのものでそれが誰に代わっても幸せに笑うんじゃないかと思った」

「だから親父は、哀しませたんだろう。涙を見ることでしか、自分への想いを確かめられなかったんだろう。あの親父が　不安だったんだ」

「愛というのが何なのか」

「俺にも分からねえ……確かだと思っ^うていても、突然空^{うつ}ろになるものだからな」

雪は男の手を包んだ。

「そんなこと……言わないでよ」

「そうだな、結婚の時に何を言っているんだ、俺は」
男はくすりと笑ってから

「俺は浮気など絶対にしない。お前に、お前の子に、寂しい思いはさせねえ」

柔らかな手を握り返した。

「愛なんて、分からなくていいじゃない……」
見詰め合う。

「天……もっと近づきたい」

「恐いな……親父のように俺は器用じゃない」

「天が初めてだよ」

「信じる」

「やっとだね……」

「好き」

「好きだ」

無垢の布がそつと白波を立てた。

十六・出航

鏡をじつと見ていた。

艶やかな銀色の髪が流れ、絹のように滑らかな白い肌がある。

「るりが綺麗のままだったら……旦那様はほんとうにあいしてくれ
たでしょうか」

「いんらんと言うことなく……全部の優しかったでしようか」

とんとんとノックが聞こえた。

「今行きます　りゅう」

白のボンネットを被って、化粧台を離れた。

+

「え、ちよが見送りに」

婦人がびっくりして浮かなかった顔を少し綻ばせる。

「そう、元奴隷だった人達を擁護する組合の代表者の一人なんだけ
どね、あの件の扇子だった人達の社会復帰の為に面倒を見ると言っ
て来たんだ。るりが外国に行く聞いて驚いていたよ。友達だから
すぐに会わせろって　通して平気？」

「友だちではないのですが」

「あ、そうなの？」

「けれど旦那様の御友人様に仕えていたので幾度か会ったことのあ
ります。ちよは贖物でしつけが良くなく、旦那様に無礼を言う不良
品の扇子でした」

「えーと、帰した方がいいのかな？」

少し困ったように言つと、え、と吃驚して首を振る。

「とても会いたいです」

「聞いてないわ！」

からんと、西洋製陶器の皿に載ったアイスボックスケーキが並びを崩す。小麦色の肌で顔立ちも愛嬌のある婦人だったが、今は気を立ててぐいと睨んでいた。

「どういふことやねん、新しい男とくつついて外国行ってしまつてゐるりはどこもくつついていませんが、」

「ボケはええねん」

自分の体を確認する仕草にはあ、と溜息を吐いて前のめりだった体をソファに沈める。

怒る気を失くしたように、しかし曇った表情で問い掛けた。

「あんた……本当にいいん？　あない仲良かったやんか」

「……ちよには関係のないことです」

「まあな、あんたは一方的に可愛がられてただけやもんな。あない傲慢で強引な男、嫌気が差して当然やわ。成程、今の男は正反对で優しそつやつたしな」

「旦那様のことを悪く言わないで下さい！」

婦人は立つて銀の瞳で睨んだ。

「りゅうとは……とても好きですが違います。りゅうとるりとは、そうではないのです」

「ほお、あれは体の関係持った男の触れ方やつたけどなあ」

「違います！りゅうは……ただ、るりの言つとおりに慰めてくれているだけです」

「慰めた？　体が寂しいから旦那の前戯でもやらせてるん？　あんたは本当酷なことするわ、子供みたいにな」

「け、けれどりゅうは、るりに何でも言つてほしいと言つて……」

「男が下心ない訳ないやろ。甘え過ぎや」

「るりは、りゅうによいと言いました。りゅうの好きなようにしてよいと……けれど、りゅうは違つと言いました」

「そりゃ偉い惚れられとるなあ。旦那に代わりたくないんやろ。較べられたくないんやろ。ほんまに好いとくれるまで待つてゐるんや。」

それなのにあなたは体弄られながら旦那の名前でも呼んでるんやろ。分かるか？あんたがどれだけ無邪気に傷つけてるか」

「呼んでいません！るりは……お人を傷つけることは、」

「あんたなんか大嫌いや。いっつもそうや。そりゃ可愛いやろなあ、餌さえやって撫でれば誰にでも尻尾振る、あんたはただのペットや！」

う、と涙がせり上がる。

「ちよには……分かりません。扇子はそういうものなのです。ちよは何も分らない。人形で良かった。扇子のままでいて、お役目を果たして無くなることであれば良かった。それが扇子の幸せなのです。死ぬ時扇子は一番に幸せなのです！るりも……そうでした。」

旦那様のものになることのなければ……」

「だからあんたは！」

立ち上がって向かい、怒鳴る。

「好きなんやろ、旦那の事が！好きで好きでもう死ねないんやろ」

「けれど！旦那様はるりがいてはお辛いままなのです。るりのいることは旦那様のお幸せにはならない……」

「知らんわ」

強気だったその婦人まで今にもぼろんと落ちそうな大粒の粒を孕む。

「何でそんな勝手なこというの？自分の傍じゃ幸せにならないとか、なんで勝手に分かるの？」

「ちよは……御友人様とは、」

「あんたの旦那なあ、傲慢で強引やけど　羨ましかったわ。あんな堂堂愛してる

って言われて、妻にしてもらって……うちらは奴隷なんにな」

「ちよ……」

「なんやその目、あんたの同情なんか受けたくないわ。うちは男に

守って貰わな生きていけへんようなあんたとは違っからな」

ぐい、と手で目元をこすると、帰るわ、と言って背を向ける。ぱたんと扉が閉まった。

「けれど……旦那様のほんとうの幸せは、ほんとうのお人と結ばれること」

とんとんとノックが聞こえた。

「今行きます りゆう」

静まり返った応接室で、ぽつんと呟いた。

「ほんとうの奥様と……」

前編終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4880r/>

紅色の狼

2011年3月23日00時11分発行